

雪舞い

芝木好子

雪舞い

雪無
い

芝木
好子

新潮
社



雪舞^{ゆきま}
い

昭和六十二年 三月二十五日 発行
昭和六十二年 七月三十日 七刷

定価一八〇〇円

著 者 芝^{しば} 木^き 好^{よし} 子^こ

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 鐵 新 潮 社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部〇三―二六六―五一―
編集部〇三―二六六―五四―

振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・大口製本株式会社
© Yoshiko Shibaki, Printed in Japan, 1987

ISBN4-10-309805-8 C0093

雪
舞
い

朝方、病人の寝息を聞いてから有紀は離れを出て、母屋の中廊下を伝つて玄関へ向つた。よく磨きこんだ板の間のまだひんやりする春先きである。

玄関から冠木門^{かぶきもん}までの敷石のわきに庭への枝折戸^{しおりど}があつて、白梅が蕾のまま枝を差しかけている。鎌倉には珍しい茅葺屋根の風雅な家で、これを建てた人は茶人だという。玄関わきの茶室から母屋のぬれ縁のある座敷も、藤棚のある奥座敷も、戸を立てたままである。四百坪の敷地の前庭はやや傾斜して、垣根の外に小川がある。鎌倉の谷^{やう}の眺めの一つで、向いは疎林におおわれた小山である。鎌倉の自然の残る昭和三十年のことであつた。有紀は花巻延^{えん}にすすめられてこの家の離れへ病氣の弟を連れてきて、よかつたと思つた。谷をかこむ家もまばらで、閑静な土地である。

隣りの竹垣をまわると、小川にかかる木橋へ出る。橋を渡つた奥に寺があると聞いていた。疎林のわきにある寺は高い石段を登つてゆくと、台地の上に広い飾らない庭と、古いお堂がある。有紀は低い植込みの根方へ目をやった。水仙が一面に植わつて、花が二、三輪ほころびている。かがむと、水仙は匂う。小綬鶏^{こじゅけい}がつかいで水仙の径をわがもの顔に歩いている。朝の寺が有紀には清々しい。本堂に詣つて一とき念じると、願いごとくも叶う気がする。

弟の病氣は肺結核で、氣胸療法をしたあとと思わしくなく、入院と退院をくりかえしてきた。肺活量が減つて、近頃は衰えが目立つている。彼の病氣の長い歲月は彼女の生き方を変えてしまった。

花巻延の言うままでなければ、今日一日も過せなくなっている。

寺の庭の外れに紅梅が見えて、咲きはじめている。仰ぎながらそばへゆくと、誰もいないと思つた植込みに男が立つていた。ブレザーを着て、首にしゃれたマフラーを巻いた、上背のある痩せた男である。静かな目でこちらを見ている。互いに見知つていて、花巻へくる客だが、馴々しく声をかけあう間柄でもない。彼女は顔を赤らめて会釈した。

「いい朝でございますね」

自分でも妙な挨拶だと思つた。

「大分暖くなつたし、この寺は朝がいい」

「香屋先生は写生においでですか」

彼女は男が画帖を手にしているのを見た。

「水仙が咲きはじめたから。この傾斜の下に少し前まで福寿草があつたが、まだあるかな」

「下は畑ですか」

「いや、墓地です。初めてですか」

彼は有紀がなぜここにいるか、考えているのだった。彼女は、申しおくれました、と言ひ、近くの慧寿庵の離れへ弟をつれて移ってきたと告げた。

「慧寿庵はどこかの料亭の別荘と聞いたが、花巻だったか。ぼくのところとは露地を隔てて隣り合
せだ」

彼女は花巻延に前から聞いていて、挨拶に出向かなければと思つていたが、この出会いはいはうれし

かった。男の背後の紅梅から、外垣の下の川へ目を移した。

「きれいな流れですが、なんという川でしょう」

「さあ、名はないでしょう。聞いたことがない」

「女が水底に沈んでもですか」

ふいだったとみえて、彼は微かに含羞の表情をうかべた。

彼女は一枚の日本画を思いうかべていた。二年ほど前に院展で見た絵で、香屋雅伸の「雪の幻想」であつた。百号の雪景色で、小川が流れている。岸には紅梅の大樹が枝をひろげて、雪をかぶつた梅花の紅が満開である。小川には水の流れの中に女が横たわっている。白いきものを着ているのは婚礼の日の女なのだろうか。乱れた髪の下顔は蒼ざめて、流れにたゆたっている。オフエリアは狂つて、花を手にして流れに沈むが、日本の女は精霊にみえて妖しい。この絵は大賞をとり、新聞にも雑誌にも紹介された幽艶な大作で、画家の代表作になつた。此処は画家にとつての秘境とみえる。

「浅い小川だが、二年あまり前の台風で水が溢れたことがある。それはすごい勢で上つてきた」

「家に、水がつかましたか」

「もう少しのところだつた。川は一変するから怖い」

彼は散歩のついでらしく歩き出して、紅梅の横の石段を降りていった。正面に地蔵が祀つてある。そのわきを折れてゆくと墓地である。思いがけなく広い墓地で、一基ごとに生垣で区切られて、まわりは大きな木が鬱蒼としている。香屋は自分の庭を歩くようにゆつくり歩いてゆく。木々を渡る風はまだつめたかつた。有紀は東京の町中にある寺の狭い墓石の下に眠る両親を思いうかべていた。ほとんど無意識に病気の弟の行く手を見ていた。心の表皮を哀しいものが撫でて過ぎてゆくのを感

じた。彼女は画家がいかにも安らかな表情で墓石の間を渡ってゆくあとから、ついていった。花巻での身嗜みと違って、ふだん着の黄色い紬に、化粧らしい化粧もしていなかった。

彼はとある墓の前で足をとめた。先頃亡くなった日本画の大家の雅号が刻んである。一生華やかな女人像を描き続けた画家にしては地味な墓であった。隅田川に近い下町の長屋に生れて、印刷工から身を起した立志伝中の人にしては墓石がつつましい。鎌倉に豪邸があったと聞いた。

「この墓、どうです」と画家が話しかけた。

「墓石が大きくても、人はすぐ忘れます。品格のある良い文字ですわ。経文を写したような」

彼は意外そうにたずね返した。

「経文を見るんですか、若いのに」

「若くありません、あと二た月で三十歳になります。経文は病気の弟が加減の良い時に写します。弟は結核で療養するまで画学生でした。初めは洋画でしたが、今はパステルや水彩を描いています」

「絵は病氣によくない」

「微熱のない、気持の良い時に描きますの。仏像を描いて紅でほかしたり、墨で紅梅を描きます。

海、というと、画帖一面に小魚が泳いでいます。墨に朱で彩った小魚が百匹も海中に列をなして泳いでいますと、ああ、と思います。弟の感じる海は、あんなに賑やかなのでしょうか」

彼女は初めて二人だけで口を利く男に、喋りすぎたと思ったが、なぜか止まらなかった。彼女が花巻の娘分として働く料亭へくる時の彼は、画壇の集りや、出版社の招宴に限られていて、口数の少ない、人みしりする画家に見えた。

「仏像は、どんなかたちのものです」

と彼は聞きながら、墓地の外れの道を一巡していた。有紀はこの問いにほっとした。

「それがかわいらしい仏さまですの。羅漢のような、笑った顔にみえる仏さまが立っていて、紅のぼかしの中にいます。弟にとつての仏は、女体なのか、とまどうことがありますの」

彼は立止つて、垣根の葉を手にとりながら、興味を抱いた顔になった。

「飾りを剥ぎとつた、良い絵を描くのだらうな。弟さんは幾歳いくつです」

「二十五歳になります。絵を少しばかり描きますと、疲労と発熱で寝たきりになります」

二人はそこはかとなひ会話を交していたが、有紀はこの時間が終らなければいい、と思つた。彼らは墓地を出て、紅梅の下まで戻つた。本堂から法衣の初老の住職が姿を見せて、お早ようさん、とのどかに声をかけた。香屋先生、お茶を一服いかがです、という。

「ありがたいな。こちらは慧寿庵へ来ている水野有紀さんです」

住職は二人を庭の端の破れた軒の下の庵へ招いた。炉に火が入っている。あたたかい三疊台目の茶室へくると、朝寒の散歩が肌にひんやりと残っている。まだ八時を廻つたばかりの時間である。

「先生は朝が早いすなあ」と住職が言つた。

「朝は自分の時間です」

「お客が多くて、奥さんみたいへんでしょう」

「家内は病氣をしてから、朝は起きませんよ」

彼は畳に正座している。住職は気取らずに黒釉の茶碗に釜の湯を通し、作法というほどでもなく薄茶を点てた。画家はそれを受けた。こんな時間が時折あるのかもしれない。やがて彼女にも一服差出された。弟を療養所からようやく鎌倉の谷までつれてきた心労が、初めて一服の茶でほぐれてゆくのおぼえた。心の底まであたたまるようであつた。住職は再び茶碗に湯をそそいで、作法通

りしまうのを、彼女は眺め続けた。

「氣持よく過しました」

正客が礼をのべると、住職は客を見比べて感じたままを言った。

「お二人はご縁辺ですか」

彼らが朝から連れ立っていたからだろうか。縁辺というのは、従兄妹とか、叔父と姪とか、面差や感じが似ているのか。人間の柄を分けた時の同類に見えるのだろうか。しかし女に似ていると言われてよろこぶ男はいないはずである。どこが似ているか、と画家が訊ねた。住職は直感で言っただけなのだ。有紀は若さの放つきらめきと、女にしては長身の姿しか、取得がない。

「似ていませんわ」

彼女は恐縮していった。画家が聞き返した。

「生れは東京でしょう」

「私の家は、神田万世橋の近くでラシャ問屋を営んでいました」

「万世橋には今でも洋服生地の間屋がある」

「神田川の岸に沿った通りでした。子供の頃は戦争が始まってましたし、洋服地の見本帳のお古を貰って遊んでいました。台紙に貼った小さなラシャ地は端が糊でついてますでしょう。おはじきをして勝ったほうが一枚ずつと剝がして溜めてゆくのが愉しみでした。何枚取ったといって勝ち負けを決めます。私の友達には小さな見本の布を持って帰ると、おばあさんがよろこんで、到頭防空頭巾を縫ってくれたと言っていました」

「ラシャの頭巾なら、上等だ」と住職は頷いた。

「あの辺りは空襲で全部焼けてしまいました。私たちの住居は本郷の三組坂にありましたが、こち

らも焼けました。父は新京へ仕事で行っていて、あちらで亡くなりました。母は氣丈なひとでしたが、先年病気でいけなくなるまで、上等のフラノの上つぱりを着てましたわ」

彼女の話す表情を画家は見ていた。水野有紀という新進の舞踊家がデビューしたことを彼は知っていて、住職に話した。住職はその方のことは不案内だったので、ラシャの小裂地こぎれを集めた少女のvariように目を瞠った。

「両親は芸事が好きでしたので、私は六歳の六月六日からお稽古事を始めました。今日まで日舞を細々と続けていますのは、親の思いが残っている、と思うからですわ」

日舞という芸事に、住職は思いを新たにしたのだった。女の顔に陰翳があつて、それが内向的な画家に似るのかと、彼らを再び見直した。画家は茶室での礼を言つたが、まだこの時間を惜しんでいた。

「香屋先生はこれからお仕事ですか。よくお描きになる」

「ほかにすることがないですから。友人におもしろくない男だ、と言われていますよ。小宮謙三がここへ来ると、ほろくそに言うでしょう」

小宮さんは江戸っ子だから、あけすけで飾らないのだ、と住職は答えた。有紀も小宮の名が出ると思わず微笑をうかべた。彼は香屋より親しい客であつた。

間もなく二人は寺をあとにして、石段を降りていった。

「瑞相寺が破れ寺なのは、住職に慾がないからでしょう」

「良いお茶室でしたわ」

「あの茶室は京都の曼殊院の八窓茶室にあやかるつもりで、三疊台目の天井にも窓をしつらえたところ、雨漏りして困るらしい」

「七窓でもよろしいのに」

言いながら笑いがこみあげたが、住職が聞いても怒らないだろうと思った。まるやかな時を過した余韻がまだ残っていた。竹垣のわきへ出た。彼女は茶席のお相伴の礼を言つて、近々引越しの御挨拶に上ります、と伝えた。

「わらつてゐる仏像の絵を、見てみたいです」

と画家は呟いた。

「ありがとうございます。弟がよろこびます」

竹垣を内廻りすると川沿いに慧寿庵の門があり、外廻りに迂回して庵のうらを過ぎ、香屋家の塀を曲ると玄関がある。両家の間に細い露地があつて、川へ出る人の近道になる。有紀は画家と別れて戻つた。慧寿庵は姉弟の住む処であつて、自分の家ではない。花巻から留守を預る徳子が雨戸をあけて掃除を済せていた。徳子は花巻の下働きをしていた中年の無口な、よく働く女である。おかえりなさい、と言つたが、何処へ、とも聞かない。

有紀は弟の病室へ行つた。朝毎に病人の顔をみるのがこわい。彼女は今日一日弟といて、明日の月曜日の午後に東京へゆく。次の土曜日の夜までの五日間に、弟は面変りしないだろうか。加減の良い時と、悪い時の落差が激しい。

「散歩ですか」と彼は床の中から目をあげていた。

瘦せて尖つた譲の顔を彼女はじつと見た。自分が画家と縁辺に見えるなら、弟も同じことになる。弟が似ているとすれば、眼許の優しさだろうか。

「なにか良いことがあつた」

病人はそう言つた。

「犬も歩けば棒に当る。小川の上の瑞相寺へお詣りして、お茶をいただいたのよ」

彼女は台地の寺の前庭で見た水仙や、小綬鶏や、墓地の眺めを語った。隣りの画家は遠い存在であつたが、紅梅の下に香屋は立っていたのであつた。

「小綬鶏か。鶏じゃなかったの」

「いいえ、小綬鶏よ。香屋雅伸の『小綬鶏と石南花』を譲と一緒に見たことがあるわ」

「御正解」

と譲は床の中から細い顎をのぞかせ、上を向いて答えた。

「紅梅に小川、破れ寺の水仙、疎林に朝の光。あのお寺は画家の夢の宝庫なのね」

「よし、挑戦してやろう。どんな画家だった？」

「物静かな、自分の殻の中に閉じ籠ってしまう人間にみえたわ。画家というより学者のようね」

「香屋さんは大学の美学を出てから、日本画を描きはじめて画家だから」

文豪の源氏物語現代語訳の挿絵と装幀で話題になったのは、彼の二十七歳の時だった。その後、同じ文豪の新聞小説が戦時中、第一部で中止になったのは、挿絵が深々とした情感で妖しさを誘うせいだとも言われた。目にする景色を石段の数も違えずに描く画家ではない。現実の風景が画家の幻想で裏返しになつてもひるまない絵になつてゆく世界であつた。

「譲の絵も、余分なものを除いたあとの精神性だけが絵になつていると思うわ」

譲は微かに顔を歪めた。姉だけが彼を信じようとするのを痛く感じる。二人で語らう時と、姉のふだんの生活の卑俗さと、どこで重なるのか。

「なに見てるのよ、私の顔」

有紀は弟の屈折した感情を撥ね除けながら、紅い仏像も、百匹の小魚も、画家に見てもらふのだ、

と思った。画家自身がそう言った。

「ばかだな。いそがしい画家が本気で言うものか。仮りに見たところで、姉さんほどにも解りはしないさ」

彼は気負つて喋り出すと、咳を出す。すると止めどなく弱々しく咳は続いたのだ。むせながら彼は言う。鎌倉の谷の墓地はいいだろうな。

「夜中に墓の下から出て、ふわりふわりとやらかす散歩もいいからな」

「ええそうよ。風の音まで澄んでるし」

二人の両親の眠る下町の墓地は狭すぎる。墓地は戦災のあと区劃整理をして、一列に並んだ墓石と墓石は台石の幅しか離れていなかった。寺のお堂は鉄筋コンクリートの倉庫のような建物であった。譲は両親に抱かれながら、窮屈を託つたろうか。衰えて、口先だけの弟に、暖くなったら瑞相寺を見せてやりたいと思う。あの石段を登るのは困難だろうか。片方の肩を彼女が支え、他の一方を徳子に支えてもらつたら行けるかもしれないのだ。名残りの庭なら、なお一層見せておきたい。

譲の横たわる部屋にも小庭があるが、板塀が高くて隣家は見えない。午後おそく裏庭へ出た有紀は向いを仰いだ。露地を隔てた香屋家も南面が庭なのか、角の二階がせり出している。そこは画室かもしれないと思う。もしそうならひじょうに近いところに画家は居ることになる。こちら向きには小さな高窓が一つあるきりである。いま偶然に高窓が明いたなら、どうだろうか。彼女は隣家の二階との距離の、あるようでない、ないようである隔たりを目で計っていた。病気の弟を抱えて、秘かに絶望を抱きながら移ってきたのは、末期を静かに迎えさせてやりたいからだ、谷の暮しにわずかな光が見えてきていた。隣家の高窓に、まだ灯は点かなかった。

次の日の昼まえ、鎌倉八幡宮まで出た有紀は、小町通りで隣家への挨拶の品を買い調えた。小町通りから横町へ入るとすぐ小宮謙三の家がある。香屋家をたずねるなら、小宮家も、と考えて横通りへ入っていった。小宮は大学へ出ていて不在かもしれないと思いながら、門を入れて案内を乞うと、奥から和服を着た小宮がふらりと出てきた。

「やあ、花巻の若女形おやまがきた」

と言う。小宮は二年前に彼女の舞台の「年増」という踊りをみて、ごく若い歌舞伎の女形が踊ったような初々しい年増ぶりがいい、と評した。それ以来折にふれて彼女を若女形、と冗談にいった。

小宮は先になつて奥へ入つてゆく。庭に面して客を通す部屋があり、本と絵画と骨董で部屋はふさがれている。庭にいた妻の孝子が上つてきた。ふいにやってきた珍しい客に対しても構えるところもなく自然である。八幡宮へお詣りにでも来たのか、としか思わない。有紀は踊りの会の度に切符を頼みにくる夫妻に、気持の中で甘えている自分を感じていた。

「瑞相寺の谷の近くに、茅葺屋根の家のあるのを御存じですか。門に慧寿庵と篆刻が出ていて、近所ではそう呼びます」

小宮は知っていた。鎌倉は空襲に遭わなかったたので、思いがけないところに古い茅葺屋根の家が残っているが、瑞相寺の谷の家は農家と違つて茶人の住居の風格があつた。その家が花巻の別宅で、今度有紀が病気の弟をつれてきた処と知ると、小宮は花巻のふところの深さに驚いたのだつた。

「あの辺りなら、病人にも空気はいいやね」

と彼は言つた。

「広い屋敷だろう」

「四百坪の敷地ですが、これは借地です。たいそう古い家で、木口はよろしいのですけど、軒は傾きかけていますの」

「小川と林が借景になるところだ。瑞相寺へ行つたかい」

「昨日の朝お詣りに行って、お住職にお茶をいただきました。香屋先生と偶然行きあいましたわ」
小宮は朝の寺と似合う香屋の顔を思いうかべていた。香屋家と茅草の家とが隣り合せになっていることは、小宮も初めて気付いた。

「香屋さまへ御挨拶に行こうと思っています」

彼はお茶を運んできた妻と顔を見合せた。

「行くほどのこともないな。玄関が並んでいれば顔を合すこともあるが」

彼は齒切れ悪く言い、孝子はなにも言わずにお茶を並べている。

小宮と香屋は大学を一緒に出た友人だが、仲違いをしたのか、と有紀は咄嗟に考えた。人と人の関係は変つてゆくのである。

「瑞相寺で香屋先生と顔が合ったものですから。紅梅は四分咲きでしたし、小川の水もぬるんでいましたわ」

「香屋はひとりでいる時の彼がいいね。あの家は客が多い。うるさいから行かないほうがいいよ」
孝子が夫をたしなめて、花巻の有紀さんにはそれなりの立場があるでしょう、と言った。

「やつぱりいらしたほうがいいわ。香屋さんも花巻のお客でしょう」

「大した客なもんか。あいつは遊びを知らない男だ。自分の金を使うすべも知らないのさ。宝の持ちぐされ」

小宮はすけすけと言ひ、有紀は苦笑がじわつと湧いてきたが、やつと堪えた。孝子もにやにやし